

カトリック 仙台教区報

2005年7月3日 No.164

発行
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

「聖体（エウカリスティア）の年」の 豊かな実りを求めて

典礼秘跡省から出された提案を実施するために

昨年の10月に始まり今年の10月まで続く、「聖体（エウカリスティア）の年」にどのように取り組むことができるのかの、基本的な提案が、すでに昨年10月15日に典礼秘跡省から全世界の教会に向けて出されました。そこで、日本では、この提案の要約を日本カトリック典礼委員会

が、去る3月に各教区に配布しましたので、それぞれの共同体で、10月までの「聖体の年」のために何ができるのか幾つかのヒントを提供したいと思います。

1. 基本的な研修

(1) エウカリスティア（感謝の祭儀）についての理解を深めるための研修会を実施する。そのために、役立つ参考文献には、次のようなものがある。

* ピエール・ジュネル著『ミサきのう きょう』ドン・ボスコ社、* J・ジェリノ著『わたしたちのミサ』新世社、* 土屋吉

正著『ミサがわかる』オリエンス宗教研究所。

(2) 主日の「集会祭儀」と「ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼



拝』について学ぶ。参考文献* 『カトリック儀式書』ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼拝』カトリック中央協議会、* 『カトリック仙台教区・集会祭儀式次第』、* 『典礼奉仕への招き ミサ・集会祭儀での役割』オリエンス宗教研究所。
(3) エウカリスティアの靈性に

ついて理解を深める。

教皇ヨハネ・パウロ2世の使徒的書簡『主よ、一緒にお泊まりください』（カトリック中央協議会）は、エウカリスティアの靈性の豊かな理解のために最適であるので、各共同体での研修のテキストとして使える。

2. 典礼における具体的提案

(1) 主日の大切さについて、改めて自覚を深める。そのために、説教や研修会で、教皇ヨハネ・パウロ2世の使徒的書簡『主の日 日曜日の重要性』（カトリック中央協議会）を用いて、主日の意義を周知徹底する。

(2) 典礼暦の頂点である「逾越の3日間」についての理解を深める。そのため、『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』（カトリック中央協議会）と、参考文献『エマオの晩餐』（カトリック中央協議会）と、参考文献『著』教会暦 祝祭日の歴史と現在』（教文館）などを利用することができる。

(3) 「教会の祈り」を、共同体で唱える。

(4) 聖体礼拝を共同体で行う。そのため、『カトリック儀式書』ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼拝』の第3章を参照する。

塩と光

『教会憲章』の冒頭で、教会は世界に対する使命を明確にしました。教会は「キリストにおける言わば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり道具である」と。この秘跡的役割を、忠実に果たすために、特にミサにおいて真の交わりと一致を具体的に体験するのです。

「わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つです。皆が一つのパンを分けて食べるからです」（1コリント10・16・17）。

また、この共同体的交わりと一致が、すでに実現していなければ、ミサにおける「交わりの儀」は、内実を伴わないものになってしまう。だからこそ、キリストの同じ体と血を皆で分かち合うことによって、靈的な交わりと一致が、聖霊の働きによって実現することを、願う必要があります。「御子キリストの御体と御血に養われ、その聖霊に満たされて、キリストの内にあつて一つのからだ、一つの心となりますように」（ミサの第4奉献文）。世界にこの交わりと一致を分かち合うために、私たちは派遣されます。（博）



第265代ローマ教皇 ベネディクト16世誕生

4月19日(火)午後6時過ぎ(日本時間20日午前1時過ぎ)にシステリーナ礼拝堂の煙突から白い煙が上がり、サンピエトロ大聖堂の鐘が鳴らされて、新教皇の選出が告げられた。コンクラーベ開始2日目、午後の1回目(最初から数えて4回目)の投票による選出であった。6時48分、サンピエトロ大聖堂バルコニーにヨゼフ・ラツツィンガー枢機卿が現れ、新教皇はベネディクト16世を名乗ることになった。



4月24日(日)午前10時からサンピエトロ広場で教皇ベネディクト16世の就任ミサが行われた。教皇は説教の中で、「神の弱いしもべであるこのわたしが、この途方もない務めを引き受けなければなりません。この務めはほんとうに人間のあらゆる力を超えています」と人間的な不安と恐れを述べながら、「わたしはひとりきりではありません。神のすべての聖人たちが、かじこでわたしを守り、わたしを支え、わたしを担ってくださいます」と、諸聖人と共に多くの人々の祈りによって支え

られていること、そして何よりも神の摂理に謙虚に自らを委ねることによって、ペトロの後継者としての特別な奉仕職を引き受けることを宣言された。また、「教会は生きている」とを強調し、「神の国建設に向か

う」全ての信徒と共に、「信仰をもっている人も、信仰をもたない人も含めて、現代のすべての人びとに」関心を向けて行く事を表明している。最後に、若者に向けて、「キリストを恐れないでください。自分自身をキリストにささげるなら、わたしは百倍を受けます。キリストに向けて扉を開きなさい」と呼びかけた。

新教皇の最初のメッセージ

「4月20日(日)から」

「聖霊の導きに従って」

主はわたしが、すべての人が安心してよりかかることのできる「岩」となることを望まれました。わたしは主に、わたしの力の貧しさを助けてくださるよう願います。それは、わたしが主の霊の導きにいつも聞き従いながら、勇気をもって主の民の忠実な牧者となることのできるためです。

「司祭たちへ」

司祭の皆様にお願いをしたいと思います。職務としての祭司職は、二階の間で、聖体とともに生まれました。聖体のいけにえを毎日、深い信心をもってささげることです。聖体はすべての司祭の生活と宣教の中心だからです。

「信徒たちへ」

聖体に養われ、また支えられながら、カトリック信者は、キリストが二階の間であれほど強く望まれた、完全な一致を目指すよう奮り立

てられるのを感じないではいられません。

「一致のために」

ローマ教会における奉仕職を始めるにあたって、現教皇であるわたしは、キリストに従うすべての人びとの完全で目に見える一致を取り戻すために、努力を惜しまず働いて、第一の任務として引き受けます。

「人類の叫び」

地面に直接置かれた故教皇の亡骸なきがらを囲んで、各国の元首、あらゆる社会的階層の人びと、とりわけ若者たちが集まり、忘れることのできない愛情と感嘆の思いをささげました。全世界が、信頼をこめて故教皇に目を注ぎました。多くの人びとにとって、この広報手段を通じて地の果てにまで伝えられた深い交わりは、現代の人類が、教皇に対して声を

一つにして行った、助けを求める呼びかけであるかのように思われました。現代の人類は、不安と恐怖を感じながら、自分たちの未来を案じているからです。

「若者たちへ」

若者の皆さんに対して、わたしは、神が望まれるのであれば、これから行われるワールド・ユース・デーの折に皆さんとケルンで会えることを心待ちにしながら、愛をこめて挨拶を送ります。教会と人類の未来であり希望である、親愛なる若者の皆さん、わたしは皆さんと語り続けたいと思います。そして、皆さんが、永遠の若者である生けるキリストをよりいっそう深く知るための手助けができるように、皆さんの期待に耳を傾けたいと思います。

新教皇ベネディクト16世略歴 (ヨゼフ・ラツツィンガー枢機卿)

- 1927年4月16日 ドイツ・バイエルンのマルクトル・アム・インに生れる
- 1946年～1951年、ミュンヘン大学とフライジング大学で哲学と神学を学ぶ。
- 1951年6月29日 司祭叙階
- 1953年 神学博士号取得。
- 1957年～1969年 ドイツ各地の大学で神学を教える
- 1977年3月25日 パウロ6世によりミュンヘン・フライジング大司教に任命される
- 1977年5月28日 司教叙階
- 1977年6月27日 パウロ6世により枢機卿親任
- 1981年11月25日 教皇ヨハネ・パウロ2世により教皇庁教理省長官、聖書委員会・国際神学委員会委員長に任命される
- 1998年11月6日 枢機卿団首席枢機卿代理に選出される
- 2000年11月13日 教皇庁科学アカデミー名誉会員
- 2002年11月30日 首席枢機卿となる
- 2005年4月19日 第265代教皇に選出され、ベネディクト16世を名乗る (78歳)

「平和旬間に応えて」

戦後60年目を迎えた今年、また8月6日から15日にかけて開催される「日本カトリック平和旬間」の過ごし方を、改めて考えなければなりません。そこで、この「平和旬間」の誕生に至るまでの経緯を振り返り、特に今年何ができるかを考えていただくための資料を提供したいと思います。

平和旬間が設定されるまで

1981年2月23日から26日にかけて訪日された教皇ヨハネ・パウロ2世は、25日広島で教皇「広島平和アピール」を、まず日本語で、次に英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ポーランド語、中国語、ドイツ語、ロシア語そして最後に再び日本語で、世界に向けて力強く発表なさりました。冒頭の日本語によるインパクトに満ちたアピールを、引用したいと思います。

「戦争は人間の仕業です。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です。この広島町、この平和記念堂ほど強烈にこの真理を世界に訴えている場所は他にありません。もはや、切っても切れない対を成している日本の二つの町、広島と長崎は人間は信じられないほどの破壊

ができる」ということのあかしとして存在する悲運を担った、世界に類の無い町です。この二つの町は、戦争こそ平和な世界をつくらうとする人間の努力を一切無にする」と、将来の世代に向かって警告し続ける、現代にまたとない町として、永久にその名をとどめるとでしよう」と。次に、英語で語られた中に、次のような貴重な言葉があります。「わたしがこの広島平和公園への訪問を希望したのは、過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことだ」という強い確信を持っているからです」と。

このアピールは、信頼に満ちたことができるという日本語の祈りで締めくくられました。「最後にわたしは、自然と人間、真理と美の造り主である神に祈ります。／神よ、わたしの声を聞いてください。それは個人の間、または国家の間でなされたすべての戦争と暴力の犠牲者たちの声だからです。／神よ、わたしの声を聞いてください。」

自分分かち合い、戦争には平和をもちて応えることができるように、英知と、勇気をお与えください。」

この感動的なアピールをいただいて、その年の司教協議会定例総会の席上で、『平和と現代の日本カトリック教会 教皇「平和アピール」に答えて』の公表が決定され、同年7月10日に社会司教委員会よりそれが発表されました。そして、翌年の司教協議会定例総会で、8月6日から15日までを「日本カトリック平和旬間」とすることが決定されました。これに基づいて、早速その年の8月6日から15日にかけて第1回「日本カトリック平和旬間」が開催されました。

わたしが、主がすべての人間の心の中に、平和の知恵と正義の力と兄弟愛の喜びを注いでくださるよう祈ります。／神よ、わたしの声を聞いてください。すべての国、またすべての時代において戦争を望まず、常に喜んで平和の道を歩む無数の人々に代わって話しているからです。／神よ、わたしの声を聞いてください。わたしたちがいつも憎しみには愛、不正には正義への全き献身をもつて対し、貧困には

戦後60周年を迎えて

今年には戦後60年にあたりますが、6月3日付けで、社会司教委員会、カリタスジャパン、難民移住移動委員会、部落問題委員会、正義と平和協議会の共催で、「戦後60年平和キャンペーン」今

各小教区においても、特にこの旬間中、平和実現のための具体的なプログラムを実施してみてください。



「戦後60年平和キャンペーン」のポスター
「いっぱい積もったピース」
デザインルーム・アオイ
関和廣さん作
ピース(PEACE)を構成するアルファベットがばらばらになって積もっている様子が描かれています。

今年には戦後60年にあたりますが、6月3日付けで、社会司教委員会、カリタスジャパン、難民移住移動委員会、部落問題委員会、正義と平和協議会の共催で、「戦後60年平和キャンペーン」今

各小教区においても、特にこの旬間中、平和実現のための具体的なプログラムを実施してみてください。



講演会・キリスト教美術への招待 絵画の中の聖母マリア

前聖ドミニコ学院高等学校長 佐藤 英樹

5月29日(日)午後1時30分から3時まで、カトリック北
仙台教会信徒館ホールにおいて、仙台ロゴス研究所主催に
よる第4回目の講演会が行われ、約110人の参加者で満
員のホールは、熱気にあふれた。

なぜ、マリアを選んだか

絵によって高められた信仰

ロゴス研究所代表・江刺俊光 313年のキリスト教の公
氏と北仙台教会司祭・ラトゥー 認により、聖堂が次々に建立さ
ル師のあいさつの後、「絵画の れるようになり、そこに絵画が
中の聖母マリア」と題し、前聖 描かれ、彫刻が置かれるように
ドミニコ学院高等学校校長の なった。それは、現在、私たち
佐藤英樹氏が、正面の が展覧会で見るよう
スクリーンに名画 に、信者たちが
を示しながらの 教会で絵画を
視覚的な講演 見るためでは
に、参加者は満 なかった。識
足していた。 字率が低かつ
講師は冒頭、 た当時の人び
5月は聖母月なの とに、司祭が説
で、キリスト教美術の 教で絵を示しなが
中でも、マリアにしばって話し 理解させるためであり、また、
たいと趣旨を説明。キリスト教 信者たちは祈るために教会に
美術は、キリスト教に関する美 行きたびに、絵を見ることによ
術工芸のすべてを含むが、特に り、自分たちの信仰が深められ
4世紀から17世紀までにしぼ たのである。
って話された。 この時代の絵画のほとんど



教で絵を示しながら

は、1人の独立した芸術家として、画家が描きたいものを自由に描いたのではない。その大部分は、師匠と何人かの弟子のいる工房で、教会や貴族たちからの依頼を受けて、制作したものである。
そのため、当時の絵画には、いくつかの約束事があった。たとえば、マリア様の衣服は赤であり、それに青いマント姿で描くというものである。この赤は、天国の愛を指しており、ブルーは、天国での真理を表している。

受胎告知の4つの形

私たち信者は「お告げ」としてよく知っているが、絵画では「受胎告知」と言っている。この「受胎告知」には、4つの形がある。

1. 天使がマリアに神のみ旨を告げる。 マリアが天使の言葉にとまどう姿。
2. 天使の挨拶は何のことかと、考えているマリアの姿。
3. 「どうしてそのようなことがありえましようか」といぶかるマリアの姿。



受胎告知 ペアト・アンジェリコ(フレスコ画)

4. 天使の「神にはおできにならないことはいりません」という言葉に、マリアが「お言葉どおりこの身になりますように」と答えている場面。このマリアの言葉は、英語では「レット・イット・ビー(Let it be)」。これは、ビートルズのポール・マッカートニーの曲のタイトルとしても有名なだが、マリアのことを歌ったものである。

お告げの絵は、左に百合を持つ天使、右に本を読んでいるマリアの構図で描かれていることが多い。ペアト・アンジェリコは9枚のお告げを描き、ダ

ヴィンチ、エル・グレコなど多くの画家も描いている。美術鑑賞によって感動し、信仰を深める

ついで講師は無原罪の聖母マリア、被昇天のマリア、ピエタなど様々なマリアの絵をスライドで示しながら、キリスト教美術を見るときの私たちの姿勢を教示した。まずマリアの絵に感じることに、そして心が動かされ、信仰が高められ、深められていくように、心を磨いてほしいとしめくくった。

参加者の中からは、今まで通り一遍で見ていた美術を見る目が開かされた。今後もこのような講演会をぜひお願いしたいという声がかれた。

(Sr.長谷川)



ピエタ ミケランジェロ

↑ 円形のマリア像は
小椅子の聖母 ラファエロ

キリシタン殉教者を偲んで 春の後藤寿庵大祈願祭と米川キリシタン祭り

好天に恵まれて

「春の寿庵祭」

5月22日(日)水沢教会主催の「後藤寿庵豊作祈願祭」が行われた。水沢市福原の寿庵廟前には水沢教会と近隣の教会の信徒、そして地元の農家の方々など、今年は、160人ほどが参加した。



から作物を守り、豊かな実りをお与えください」との祈りが唱えられ、ミサの中では、田畑の祝別が行われた。

教区管理者平賀徹夫神父の主司式のもと6人の司祭による共同司式でミサが行われた。共同祈願では、「後藤寿庵の模範に励まされて、勤勉に働く私たちに豊かな恵みをおあたえください。」「農業に携わる人々の苦勞をかえりみ、不慮の天災



ミサに続いて、北上市和賀町岩崎在住の郷土史家、斎藤駿一郎氏により「後藤寿庵と石崎」と題して、寿庵終焉の地についての興味深い講話が行われた。五月中旬は低温の日が続ぎ、農家にとっては心配な日々であったが、寿庵祭当日は、野外ミサに最適な好天に恵まれた。地元の人々から「おらほの寿庵さま」と敬愛されるキリシタン武將後藤寿庵によつて造られた「寿庵堰」に流れる水が、今日も胆沢平野に広がる水田をうるおしている。今年もまた豊かな実りの秋を迎え、9月にはまたこの場所で地区主催の「豊作感謝祭」が行われることになっている。

(水沢教会・西川桂子)

巡礼地に聖歌流れて、 全国から150名集う

「第22回米川キリシタンの里祭り」が盛大に開催

米川教会(宮城)と地元自治会が共催する「米川キリシタンの里まつり」が6月5日(日)に登米市東和町米川地区の隠れキリシタン殉教地を中心に盛大に開催された。祭りには、登米市住民、米川教会や県内外の信徒ら1200名が集まった。

米川地区は古くから隠れキリシタンの地として有名で、全国各地の信徒が一年を通して巡礼に訪れている。この祭りは、120名の殉教者の慰霊をすることを目的に22年前に開催されてから、毎年内容を変えながら続いている。

祭りは大きく分けて二つに分かれ、殉教地である山上の青空ミサは米川教会が担当し、下の広場の祭りは地元自治会の実行委員会が担当、工夫されたプログラムで違和感のない内容になっている。

青空ミサは、米川教会献堂50周年記念ミサということで例年以上の信徒の参加があり、狭い会場は人でいっぱいになった。三経塚の林間において平賀神父主司式で5人の司祭によ

りミサが行われた。説教はこの祭りを長く支え現在は白河教会の高橋昌神父が、青空ミサの思い出話を入れながら、殉教の尊さを説いた。出席者全員が、殉教者への献花をもって1時間以上のミサを終了した。

ミサの前には合併間もない登米市長代理や地元市議の歓迎の挨拶、地元歴史研究家の講



演も行われた。

ミサ終了後一行は会場を移して昼食、売店でお土産を見繕い、遠方の友人との語らい等、楽しい時間はあっという間に過ぎた。信徒の中には、神戸市、京都府、平塚市、東京都等、遠方からの参加もあり祭りが定着したことが伺われた。

登米市は4月1日に合併した関係で全世帯にチラシを配布、その効果で例年以上の人が

集まり、売店はうれしい悲鳴、特に食べるものがほとんど完売という状態であった。

(米川教会・佐藤憲一)

<シリーズ> 188名日本殉教者列福の推進 - ガスパル西玄可とその家族

ガスパル西玄可(にしげんか)は1556年頃生月(いきつき)に生まれ、幼少にして受洗、妻ウルスラと共に殉教者一族を築いた。次男トマス兵次は有馬のセミノリオに学び、1614年国外追放されたが、司祭になる望みを絶ちがたく、マニラに渡り、ドミニコ会に入会、司祭に叙階されて日本に潜入帰国。1634年殉教。現在聖人の位にあげられている。平戸の領主松浦鎮信(ちんしん)は反キリスト教であり、1609年11月、生月の中心人物西玄可に棄教を迫った。棄教を拒んだガスパルに死刑の宣告が言い渡された。11月14日処刑場に連行され、斬首された。妻ウルスラと長男ジョアン又一も連れ出され、連行途中でウルスラは後ろから刺し殺され、ジョアンはひざまづいて刀を受けた。生月ではガスパル様と呼ばれて今も尊崇を受けている。

ラ・サール会本部修道院完成

兄弟のように共に住むのは美しく、楽しいこと。

(詩編33 1)

昨年のラ・サール・ホームに訪者を優しく迎え入れてくれる。自然環境にマッチした建物。自然環境にマッチした建物。本部修道院(ホルへ管区長・宮城野区東仙台台)が完成し、6月4日(土)午後2時から落成式、引き続きオープンハウスが催された。



式には平賀神父をはじめ各修道院、教会関係者、地域の方々が出席し、新しい修道院を祝福した。

式のあいさつで、ホルへ管区長は「皆さんこの建物にそれぞれの感想を持たれたことと思います。訪れた皆さんがこの家に神の存在を感じていただければ幸いです。共同体の一員である皆さんが自分の家と思っ

新修道院はラ・サール・ホームの西方に建てられ、円形の聖堂と、聖ラ・サールの胸像が来

いつでも訪問してください」と話された。また、ホームの子供たちに、修道院とはどんなものか知ってほしい。聖堂の大きな窓は、子



供たちが十字架や聖櫃をいつも見られるように、「おはよう」「さよなら」の声がいつも聞こえるようにと、子供たちへの温かい配慮が感じられる。

旧修道院の建物「写真左」

は、昭和23年、戦後の混乱期に建てられ、天をつく真っ白い十字架は、地域住民のシンボルとして長年親しまれてきた。解体を惜しむ声の中、このほど使命を全うし、その姿を新しい建物に譲った。



「私は、あなたの名を呼ぶ」

宮崎カリタス修道女会

Sr.川添 孝子

母がよく、私に修道生活を勧めてくれていたことがありました。信仰深い両親のもとで苦楽を共にしている私にとって、母が語ることは私の胸中を動揺させていました。しかし、ある出来事に遭遇した時、やはり迷っていた私の気持ちを召命へと決意させてくれたこの時が神の呼びかけだったのだと思います。それからまもなくして、学生志願者

招きにごたえて



から奉献生活への道を歩み始めました。初誓願から数十年を迎える奉獻生活の道のりを振り返って見た時、私を遣わして下さった場所の大半は福祉の現場

でありました。そこでキリストはいつも弱い私と共にいて下さり、恵みと慈しみで支え、ありのままの私を受け入れ、使命や召命に応えようとする時、神様は決して一人にはし

ておられない、共に歩んでくださったことを確信し、その恵みに感謝しています。これまで、私の奉獻生活を見守り、祈りで支え、出会いを通して励まし愛して下さった方々に感謝し、これからも、イエスのみ心の愛の使徒として、絶えず神の呼びかけに心を開きながら、平和と喜びの中に愛を持って生涯歩み続けることができるよう努めていきたいと思えます。

どうぞ、祈りの中で思い出し、お祈りください。

新刊案内

『よみがえる明治の宣教師
ハルブ神父の生涯』

著者 廣瀬 敦子

発行所 サンパウロ

定価 2,200円+税

1889年(明治22年)に来日し、1945年(昭和20年)80歳で神のみ国に召されたハルブ神父の生涯が、彼の宣教した長崎、奄美大島などを中心に、当時の社会情勢を含めていきいきと描かれている。単に一司祭の生涯に留まらず、明治・大正・昭和の宗教的に困難な時代を生き抜いた教会の姿を描いた力作。

1999年2月から「カトリック新聞」に連載されたものをまとめたもの。

著者・廣瀬敦子さんがふと見た一つの碑文、それをきっかけに、ハルブ神父というあまり知られていない、パリ外国宣教会の一司祭の生涯を掘り起こす。



2005年度あけの星総会

講演「主よ、一緒にお泊まりください」

6月5日(日)元寺小路教会に14

8名が参加し、総会

が開かれました。

あけの星会は、仙

塩地区8教会が集

まり、日力連活動・

いのちの日ミサ・巡

礼・黙想会・世界祈

禱日などの行事を

通して親睦と霊的

向上を図っていま

す。

議事は滞りなく承認され、日

力連・阿部正子理事より、いの

ちを守る運動基金から宮城の

てかみ砕いて教えていただき

ました。

昨年10月から始まった「エウ

カリステシアの年」は「聖体」

とのみ訳すより「聖体祭儀」と

捉える方がよい。同時にそれは

感謝の祭儀の中で、一つのパン

が分け与えられ、共に一致する

のであり、一致した共同体は

「行きましよう」と派遣されま

す。エウカリステシアは教会生

活における一致を表すだけで

なく、全人類の連帯を押し進め

ます。ミサにあずかり「行きま

しょう、まだ来週！」ではなく、

ち合い、一致と平和、連帯の推

進者となりましよう」と講話を

結びました。

会は、最後に「主よ、一緒に

お泊まりください」の言葉を黙

想し、共にロザリオの祈りをさ

さげ、感謝のうちに閉会いたし

ました。

(阿部利枝)

ただいま！です。去る5月

20日、三年余りのイタリア留学

を終え、仙台教区に帰任いたし

ました。

イタリアでは最初の四ヶ月

間ペルージャにて語学学校へ

くれたように思います。そして、

一步一步手探りでイタリア

での生活が始まっていきまし

た。

語学研修を終え、ローマに移

り、生活に少しずつ慣れていく

うちに楽しみを見いだす余裕

も生まれてきたように思いま

す。バチカンでの教皇謁見への

参加や歴史のある大聖堂の訪

問、友人とガイドブック片手

にうまいピッツァ店を探して歩

いたり、スクーターを手に入れ

てローマの町中を走り回った

り！。

また、共にこの時期を過ごし

た横浜教区の保久(やすひさ)神

父はもちろん、教皇庁でお働き

の濱尾枢機卿様やグレゴリア

大学で教鞭を執っている菅原

私にとって慣れ親しんだ日

本を離れ全く未知の国へ行く

ということ、大きな不安とプ

レッシャーを伴うものでした。

でも、そんな私をまず迎えてく

れたのは初夏の地中海特有の

抜けるような青空と爽やかな

ペルージャの風でした。この季

節の恵みが、語学力へのストレ

スや焦りから私を解き放つて



ウルバニア大学にて、左からエマヌエル神父(ブルキナファソ)、和野神父、パウロ神父(韓国)



イタリア留学を終えて
仙台教区司祭 和野 信彦



コレジオ・サン・ピエトロから望むバチカン宮殿

各地から

青森 五所川原教会

北緯41度位の所に位置している五所川原市は、この4月から金木町と市浦村が合併し、桜の名所「芦野公園」、太宰治記念館「斜陽館」と見学する場所が増えました。夏には高さ22m位の立ちねぶたと云つのもあり、こちらにおいての時はずいぶん五所川原教会にお立ち寄り下さい。

今、教会の玄関先では、駐車場を作るための工事が進んでいて、乗用車4〜5台位駐車できる予定です。

3月まで一年間、渡辺昭一神父様が当地に住まれ、とても幸せな一年でした。4月からはエノ神父様が第2週と4週、デユベ神父様が第5週目の日曜日にいらしてミサがあります。



10人前後の信者が集まり、ミサの後集会祭儀の勉強会を毎回、回りに、その後茶話会です。家庭的な集まりですが、

皆仲が良く団結力のある教会だと思っています。

写真は、弘前市にお住まいの工ノ神父様をお訪ねし、ミサにあずかり、写したものです。

宮城 八木山教会
先遣隊の韓国巡礼
ユン神父様や鄭還泳(ジョン・ハンヨン)教授(約一年前に八木山教会にこられた東北大学理学部地理学教室客員研究員・韓国国立公州大学教授)から、韓国の殉教者や巡礼地の話を聴き、



ぜひ巡礼したいとの願いが叶い4月18日から22日まで、韓国聖地巡礼の旅にユン神父様・鄭教授と先遣隊として壮年5名、総勢7名で行ってきました。

その後は茶話会です。家庭的な集まりですが、隣国である韓国の素顔をも見

てほしい」との願いで、神父様のお借りし、お二人の運転で時間に縛られず自由で有意義な、そして味わいのある旅をする事が出来ました。

18日午後一時過ぎに仙台空港を旅立ち、2時間半後には仁川空港に到着。
翌日は、韓国の伝統文化を紹介している韓国民俗村へ行き、朝鮮時代の各地方の民家や家財道具・民俗衣装などを観たり、民族遊びの実演や伝統婚礼の再現などを興味深く見ました。その後、ベロン聖地「写真」を訪ね、この地は、韓国における天主教伝播の震源地として歴史的に重要な意味を持っており、また、韓国最初の神学校があった所で韓国全土から多くの巡礼者が訪れるそうです。

三日目は、日本海(韓国名は東海)に面し北緯38度線に隣接してある高城の統一展望台へ行き、国が南北に分断された厳しい現実を体感しました。



展望台近くに「聖母像」と「弥勒仏像」が北に向かって安置されているのが印象的でした。その後、「冬のソナタ」で有名になつた春川市を經由してソウルへ。

四日目は、韓国カトリックの中心でゴシック建築と美しい内部装飾で有名な、そして地下墓地に殉教者が安置されている明洞(ミョンドン)聖堂に聖体訪問しました。



午後には、1866年に多くのカトリック信者が首をはねられ殉教された切頭山聖地を訪れ、祈りを捧げました。

今回の巡礼で韓国カトリック教会の力強さを感じると共に、隣国でありながらあまりにも多くのことを知らなかったことを反省し、今後、日韓カトリック教会の親交が深まり、主の道を共に歩んで行けるようにと願いながら帰途につきました。

原町教会は、福島県の浜通り、いわき市と相馬市の中間辺に位置し、ドミニコ会所属

(若原裕代)

活動紹介

パッチワーク毛布の会

八戸塩町教会

家庭で不要になった毛布を教会の皆さんに寄付して頂き、30センチ四方、24枚を配色よくはぎ合わせ、更に芯地、裏地を付け毛布風に仕立て上げ、鮫町税関の検閲を受け、船便でカールカタ「神の愛の宣教師会」に送っております。

この活動は1998年12月

私の気分転換

ラ・サール・ホーム理事長

石井 恭一

子供の頃、楽器の音に「神様の声の通路」的な神秘さを感じていた私が、毎日家でオルガンを弾きながらピアノストを夢見ていたのはごく自然でした。しかし「男の子にピアノは不要」という祖父の一言で幼き夢は消え、音への関心は三円五十銭で手にしたハーマニカへと移りました。落差は急激でも「神様の通路」が手から口に近いと私は夢中になりました。

ラ・サール会員となってアコーディオンにも手を出し近

から始まり今年で7年目、年2回の発送で、この6月1日で累計215枚となりました。当初は4、5名のメンバーでしたが転勤で減少し、現在は2名のみ、合計年齢143歳、時に、縫製を協力してくださる方を得、毛布を受け取る人々の喜びを思い浮かべ、祈りをこめて製作しております。カールカタの修道院から毎年クリスマスカードと、2、3年ごとに活動報告が

所迷惑もどく吹く風、通路新開拓に励み、やがて鹿児島でエレクトーンに出会いヤマハ教室で「石井さんのセンスはすばらしいです」というきれいな女の先生の言葉に舞い上がり、四本目の通路開拓に挑戦するも、学園紛争で急ぎよ函館へ。構内で授業放棄を叫ぶハンドマイクの騒音の中でこの挑戦にもエピソードマーク。
いい加減な楽器遍歴の言い訳に「君たちにあえて幸せだったよ」とキザな言葉を楽器たちにかけてやるのですが、でも彼らとの付き合いが気分転換を越えた何かを私の心に刻み込んだのも確かです。



修道院紹介

聖ドミニコ女子修道会

北仙台修道院

届きますが、その中に「私たちの活動は大海の一滴ではないか」という気持ちにおちこむこともある「云々」という一文があり、私たち、はるか遠くの共同体からの小さな協力が支えとなり、今後の活動に一致と希望が持てますよう祈りながら作っております。(城前、岡村)

聖ドミニコのカリスマを生きたる聖ドミニコ女子修道会は、全世界に約150の修道院があり、日本には九つある。当院は、北仙台教会から5分ぐらいのところであり、庭先は聖ドミニコ学院北仙台幼稚園である。この場所は、現在の北仙台教会が落成するまでは教会および幼稚園として使用されていたが、初代主任司祭ピソネット師が私たちを協力者として招かれたため、1949年に修道院を設立、同年8月には、「北仙台幼稚園」の設置許可を受けた。



こうして始まったミッションは今なお続いている使徒職である。その他に聖書の勉強、受洗希望者や受洗後の同伴、若者の集い、教会の手伝い、施設へのボランティアなどが幼稚園勤務の2名のほか、5名の姉妹の仕事である。

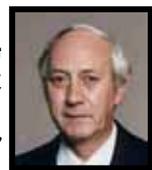
み言葉をのべ伝えるために祈りと勉学に励んだ聖ドミニコのあとを歩く修道共同体である。

最後に、信徒の皆様が私たちのために祈り支えてくださっていることに深く感謝します。

(Sr 佐野秀子)

訃報

マルコ・ゲンペリ神父
ベトレヘム外国宣教会



4月21日、スイスのワレンシユタツト町の病院で肺がんのため帰天されました。62歳でした。

4月25日は、マルコ神父様の霊名のお祝い日ですが、この日インメンゼーのベトレヘム会本部で葬儀が行われました。

マルコ神父様は、1975年に来日、2001年のスイスへの帰国の時まで、仙台教区でお働きくださいました。

ジャン・デユニー・トランブレ神父

ケベック外国宣教会



5月18日、カナダのシエルブルックで帰天されました。72歳でした。葬儀ミサは5月24日、シエルブルックのカテドラルでささげられました。

トランブレ神父様は、1960年8月に来日、1987年のカナダ帰国まで、仙台教区では八戸塩町教会、浪打教会、八木山教会、一本杉教会等でお働きくださいました。5月28日(土)八木山教会にて、追悼ミサが行なわれました。お二人の神父様の永遠の安息をお祈りください。